

世界の難民情報を伝える

UNHCR NEWS

United Nations High Commissioner for Refugees

Number

10

1999年 第1号



Contents

Special Report

アフリカの難民キャンプは今
～難民と出会って～

キャンプ・サダコ1998年報告

Update

世界各地の難民状況



UNHCR

国連難民高等弁務官 日本・韓国地域事務所

アフリカの難民キャンプは今 ～ 難民と出会って～

キャンプ・サダコ1998年報告

UNHCRでは、1993年以来毎年、若者を対象とする研修プログラム「キャンプ・サダコ」を実施している。

緒方貞子高等弁務官にちなんで名付けられた「キャンプ・サダコ」は、難民援助の現場を実際に体験することによって難民問題への理解を深め、その体験をもとに難民問題とUNHCRの活動について理解、支援を自国で広めていく人材の育成を目的とするものだ。これまでに世界中から250人以上の若者が「キャンプ・サダコ」に参加している。

1998年は、全世界から50人が選ばれ、主にアフリカの難民キャンプに派遣された。日本からは、社会人3人、大学院生、大学生各1人の計5人が参加し、それぞれケニア、タンザニア、コートジボワールの難民キャンプで、7月～8月の4～6週間、活動を行なった。

日本ではなかなか知ることのできないアフリカの難民キャンプの状況。今回、ボランティアとして「キャンプ・サダコ」に参加した日本の若者が、アフリカで一体どんな活動を行ない、何を感じたのか。彼らの見たアフリカの難民キャンプの“今”を、帰国後の広報活動とともに報告する。

写真提供:筆者



タンザニアのキボンドで、皆で紙飛行機を作って(左に立っている人が教育コーディネーターのアブドゥールさん)

アフリカ難民キャンプの 現状と活動

現在、アフリカには600万人以上の難民および国内避難民がいる。民族紛争や内戦などのため、なかなか減らない。こうした難民たちの多くが、今なお難民キャンプでの生活を強いられている。一方で、祖国に平和が戻り、帰還を果たした難民も多く、その数は1997年だけで約170万人にのぼる。

今回、「キャンプ・サダコ」参加者が訪れた難民キャンプもその例外ではない。増え続ける難民と帰還する難民。こうした難民を保護するUNHCRの活動に、「キャンプ・サダコ」参加者は携わった。

増え続けるブルンジ難民
タンザニア キボンド難民キャンプ
増田直美(保険会社勤務)

難民がやってくる

タンザニアの西部タンガニーカ湖のほとりにあるUNHCRキゴマ支所から車で7時間のキボンドにある4つのキャンプ。ここに、ブルンジからの難民、約8万5000人がいます。

このキボンドのキャンプを初めて見たとき、一面の乾いた赤土に圧倒されましたが、豊かな緑と、乾季でも水不足にならない恵まれた水源、朝晩は少し寒く感じるくらいの過ごしやすい気候がとても気に入りました。ここは、1994年2月に最初のキャンプが設立されてから既に5年近く経っているため、とても落ち着いた穏やかな印象を受けました。しかし、ブルンジの内戦は、激しくなって、帰還どころか毎週300人以上の新しい難民がやってきているような状態でした。キャンプ生活も長期化している中で、難民にとっては希望の持てない毎日です。

難民は国境からUNHCRのトラック

に乗ってやってきます。キャンプに来た難民はまず受付で登録をし、家族単位で1区画の土地をもらいます。1区画は、10m×20m、定住型のキャンプでは20m×40mで、まずは3～4日で土とビニール・シートの家を作ります。定住型のキャンプでは、キャッサバ(いも)の一種などを作って自給を目ざしています。

『トウタ・ルディ』(いつか帰ろう)

キャンプにおける教育の現状は、設備の面では木とビニール・シートでできた簡易の建物に手作りのいすがあり、机は、あるキャンプとないキャンプがあります。教科書は先生だけが持っていて、教材は全て手作りです。生徒には、ノート、消しゴム、鉛筆が配給されています。

今は、難民登録で人数や年齢がしっかり管理されているため、就学年齢の子もたちは全員学校にいきますが、一年間で約一割の生徒が学校を辞めていきます。その主な理由は学校に着ていく洋服が無いからだという、日本では信じられないものでした。

ちょうど私がキャンプを訪ねた初日に、洋服の配給があり、これが偶然、日本から届いた古着だと聞いて驚きました。しかし、洋服の配給はこの一年で初めてで、この次いつあるのかわからないとのことでした。着の身着のまま逃げてきた難民の人たちは、配給以外に洋服を得る方法がありません。

キャンプでの活動としては、残念ながら学校は休みでしたが、先生方の勉強会に出て、私のキャンプ・サダコ参加の目的を理解してもらい、子どもたちを集めて、お絵描きや歌、ミッフィーのぬりえ、紙飛行機作りをしました。その中で、国連機関の担当官が、子どもたちが学校に来るのが楽しくなるよう、ぬりえを低学年のクラスに取り入れると言ってくれました。一番人気があったのは、紙飛行機。先日、難民の

難民キャンプの「食」生活 コラム コートジボワール タブー難民キャンプ 安藤由香里(大学院生)

難民は何を食べているのだろうか?

西アフリカでは、主にキャッサバという大きなジャガイモのようなものが食べられている。これは水が少ない所でも育つ丈夫な作物のため、水が不足しがちなサハラ以南のアフリカでは非常に重要な食べ物である。

ゴボウのようなヒョロツとした苗木を植えて6か月たつと、キャッサバの食べ頃である。皮をむき、すりおろして重石をのせ一晩おき、水分が出切ったものを火で炒って保存する。食べる時には水を含ませ蒸したら出来上がりである。通常、すりおろした唐からしと揚げ魚と一緒に食べると言うが、現金収入を得る手段が少ない難民にとって、魚は「ごちそう」となっている。

道路では焼トウモロコシ売りの少女をよく見かける。炭焼きのトウモロコシは、焼きたてがとてもおいしく安いので、難民たちの好物だ。日本のトウモロコシに比べ粒がやや固いが、これも難民の食生活を支える重要な食べ物である。

お祝いの日には菓子心ゆくまで味わう。リベリア難民が通う高校の卒業式に参加した際、10歳くらいの少女が、お母さんの作ったピーナツせんべい売りを売って

いた。こうした手作りの食べ物を売るのも現金を得る重要な手段なのである。

そして、市場には、あらゆる野菜、果物、干し魚が並んでいる。オレンジやバナナが入荷された日にはそれぞれ市場にあふれる。また、市場は難民が自分で育てた作物を売る場でもある。そこで得たお金で購入した作物が、その日の食卓を飾るといふ。特に、難民はプランタンというバナナの一種や落花生を食べ、栄養源としている。こうして限られた食べ物の中で生活している難民に出会うと、改めて食べ物の大切さを教えられたような気がする。

写真提供:筆者



焼トウモロコシ売りの少女 / タブー(コートジボワール)

教育コーディネーターから、次の手紙が届きました。

親愛なる永遠の友ナオミへ

(中略)

君が残していった紙飛行機の作り方を受け取った。紙飛行機作りは全ての小学校で続けています。本当にありがとう。子どもたちが学校を続けるのに大変役立っています。

(中略)

キボンド地区 デュタ・キャンプ
アブドゥール・カリム

子どもたちが学校を楽しんでいると感じ、厳しい環境の中で、ひとつでも多くのことを学んでくれるよう願っています。

最後に、『Tuta Rudi(トウタ・ルディ)』とはスワヒリ語で「われわれはいつか帰る」という意味です。キャンプのマーケットの美味しいお料理をだすレストラン「トウタ・ルディ」の名前は、日を追うごとに、その言葉の持つ意味の深さを感じるようになりました。これは、全ての難民が一番強く願っていることであり、私もその日が一日でも早く来るように、いつも「Tuta Rudi」と祈っています。

帰還するリベリア難民 コートジボワール ダナネ難民キャンプ 根本^{みお}巳^お政(大学生)

難民の自主帰還作業

西アフリカ、コートジボワールのダナネ・キャンプでは、リベリア難民の自主帰還事業を実施していた。これは、本国に帰りたいという意思のある難民に対し、UNHCRが帰国の支援を行なうものだ。

ダナネは、隣国リベリアとギニアの国境まで20km前後という国境付近の山間部に位置する。この街には、1989年のリベリア内戦発生以来、約8万人のリベリア難民が流入した。日本ではほとんど報道されないが、リベリアでは民族対立が絡んだ激しい内戦が7年以上も続き、悲惨な殺りくや拷問が繰り返され、その結果、女性や子どもを中心に、多くのリベリア人が故郷を捨て難民となり、隣国コートジボワールに逃げてきたのである。

リベリアでは、1996年に平和合意が達成され、現在は一応の平静を取り戻している。それを受け、UNHCRではリベリア難民の自主帰還事業を開始した。私が携わったのは、この帰還事業に必要な登録確認や統計、配給などである。また、最終的に、

難民を祖国リベリアへ輸送するコンボイ(輸送隊)を補佐しつつ、帰還する難民に同行することもできた。もちろん、これらの活動はすべて手作業。時に炎天下で行なう仕事は、まさに体力勝負といった感があった。

いざ故郷リベリアへ

帰還当日、早朝から多くの難民が荷造りをして待機していた。私たちUNHCRやNGOの職員は、既に帰還希望者として登録された難民をトラックに乗せ、ダナネから国境へ、そして国境からリベリア各地へと輸送していく。通常、1度のコンボイで数百人の難民が帰還する。故郷のリベリアの街まではわずか100km余りの道のり。しかし、道路事情が非常に悪いため、早朝に出発しても到着は夕刻である。

それでも、難民たちにとっては、故郷に帰るといふ喜びは格別なのである。皆それぞれにお気に入りの服を着て、出発を今か今かと待っている。難民たちの間からは、手拍子と歌が始まった。大人も子どもも、トラックから身を乗り出して帰還を祝う歌を歌う。この時ばかりは、我々スタッフも仕事の手をとめて、難民と一緒に手拍子するのであった。

そして、いよいよ出発。私はUNHCR

のジープに乗り込み、トラックに並走して国境付近の熱帯雨林のジャングルの中を進んだ。むき出しのままの赤土の道とアップ・ダウンの激しい山道の連続。難民たちは、トラックにしがみつこうようにして、リベリアまでの道のりを耐えていた。内戦時、彼らはこの道を着のみ着のまま歩いて逃げてきたのである。それを思うと、「帰還は本当にうれしい。ありがとう」と語る難民の言葉に、思わず胸がつかまってしまう。

日も傾き始めた頃、ようやくリベリア国内の最終目的地に到着した。すると、難民たちの間から歓声が湧きあがった。ふと見ると、数十人の群衆がトラックを取り囲んでいる。既に帰還を果たした人々が出迎えに来ていたのである。トラックから一人ひとり難民を降ろすと、一目散にその群衆の中にかけていく者もいる。抱き合って再会を喜びあう難民たち。祖国に戻った彼らだけでなく、帰還事業に携わったUNHCR職員にとっても、安堵する瞬間であった。

こうして、コートジボワールだけで、今後、約10万人のリベリア難民がUNHCRの支援で帰還する予定である。アフリカの難民の置かれた状況はまだまだ厳しい。しかし、少しずつではあるが、祖国での平和な生活を取り戻しつつある難民もいるのである。

写真提供:筆者



帰還のコンボイのトラックに殺到する難民たち / ダナネ(コートジボワール)



キャンプ・サダコの派遣先

日本国内での広報活動

「キャンプ・サダコ」のもう1つの重要な活動は、国内における広報活動である。「キャンプ・サダコ'98」参加者は、実際に経験した難民キャンプの状況、そして目の当たりにした難民の現実の姿を、広く日本の人々に知ってもらうために、これまでさまざまな活動を行ってきた。

各参加者は、難民キャンプへ出発する以前から、地方紙やテレビなどのメディアを通して、UNHCRの活動や難民問題について積極的に広報してきた。今年は、「日本の子どもたちと難民キャンプの子どもたちとの絵画交流」という共通テーマのもとに、事前に日本で小学校や幼稚園に向き、日本の子どもたちに「難民キャンプに届ける絵」を描いてもらった。

そして、帰国直後の9月には、名古屋において「帰国報告会」を実施した。難民キャンプの子どもたちとの絵画交流と、その絵の展示を含むこの報告会は東海銀行国際財団の協力を得て実現し、250人以上の一般市民が訪れた大規模なものとなった。同時に、各参加者がそれぞれの難民キャンプから持ち帰ったさまざまな「もの」の展示も行なった。展示されたのは、難民の作成したタペストリーや木工製品。さらには、難民キャンプで配給されていた米や水汲み缶まで、難民の生活を思い起こさせるいろいろな物が、訪れる人の目を引いていた。

また、その他にも、ラジオ番組へのゲスト参加や、英語学校などでの講演、企業内で開催された難民の子どもたちの絵画展など、幅広く活動を行なっている。現在も、新聞のインタビューや雑誌などへの体験談の寄稿を通して、難民問題をより多くの日本人に知ってもらうため努力している。

広報活動の中でも特に力を入れたのが、小・中学校での報告と難民の子どもたちの描いた絵をモチーフとした「絵葉書プロジェクト」である。



‘98キャンプ・サダコ帰国報告会(前列右から2, 3, 4, 5番目, 7番目が98年の参加者) / 名古屋

小・中学校での報告活動

ケニア カクマ難民キャンプ
坪香理子(中学校講師)

中学校の英語教師である私は、まず受け持つ中学3年生の授業の中で、ケニアにおける私の体験を話した。スライドを交えた難民キャンプの話をしている生徒の眼差しは、みな真剣そのもの。その中に、「私も難民キャンプに行って人々を助けたい」と感想を述べてくれた生徒がいた。彼女は看護婦を目ざしていると言う。私の話を通して難民の存在を知った彼女が、これをきっかけに今後何らかの形で難民問題に関わってくれることを私は期待している。

また、小学校では、全校生徒を前に講演をした。内容は低学年の生徒には少し難しかったかも知れない。けれども、ケニアという国のこと、難民と呼ばれる人々のことを、彼らの心に少しでも残すことができたのではないかと思う。うれしいことに、質問もたくさん出た。難民キャンプのトイレの様子など、身近な難民の生活について特に関心が高かったのが印象的であった。中には、「食糧を援助すると、援助した国の食糧がなくなってしまうのでは」というかわいい質問も。彼女は援助する国のことを心配したようだが、そんな思いやりの心をアフリカの難民

にも向けていけるよう、大切に育てていきたいと思う。

このように、小・中学生も決して難民問題に無関心ではない。ただ、これまで知らされることがなかっただけなのではないだろうか。その意味では、学校での報告活動は非常に重要であろう。私は教師という立場から、できるだけ多くの生徒たちに難民という存在を知ってもらいたいと考えている。生徒の中には、アフリカや難民について誤った差別意識を持っている子もいるのが現実である。まず、難民について正確に知ってもらうこと。そのために、私はこれからもいろいろな学校や集会の場で、難民キャンプでの体験、そして難民問題について語っていきたいと思う。

98年12月19日付 中日新聞



カクマ難民キャンプの様子について説明する筆者

難民の子どもたちの 絵画交流 タンザニア インガラ難民キャンプ 西見さつき(外資系広告代理店勤務)

「私にもこんな絵が描けるなんて思わなかった!」。白い画用紙の上に絵を描くのは初めてという8歳の女の子が、完成した自分の絵を見て独り言のようにつぶやいた。タンザニアにあるブルンジ難民のためのルコリ・キャンプ。その難民の子どもたちのために開催した絵画コンテストでのことだ。

98年キャンプ・サダコ日本人参加者5名は共通テーマとして日本の小学校、幼稚園の子どもたちと難民キャンプの子どもたちの絵画による交流を選び、それぞれ地元の小学校、幼稚園などで絵を描いてもらった。日本の子どもたちから難民の子どもたちへのメッセージとして描かれたのは「日常生活」「大切なもの」、そして「家族」。私たちはそれらの絵と寄付で集まったクレヨン、画用紙、色鉛筆などを持参して各自、キャンプに向かった。

現地の小学校で行なった日本の子どもたちの絵画展では、そのカラフルな絵に、難民の子どもたちは一様に驚いていた。アニメの影響を受けた日本の子どもたちの描く絵は、難民の子ども



小学校で開催した日本の子どもたちの絵画展 / (ンガラ・キャンプ)

たちにはとても不思議に映ったようである。

次の日、同じテーマで難民の子どもたちに絵を描いてもらった。楽しそうに作業していた子どもたちだったが、実際に出来上がった絵を見てみると、内容は幼い彼らのおかれた現実を反映していた。幼い頃からキャンプで育った小さな子どもたちは、自分たちの家であるビニール・シートのテント、援助団体の四輪駆動車、水タンクといった難民キャンプの日常生活を描き、祖国の記憶が鮮明な大きな子どもたちの多くは銃を向ける兵士を描いていた。黒、灰色といった絵の色彩の暗さに、彼らの心の傷の深さを感じてしまった。

1999年キャンプ・サダコ と募集要項について

99年度については、2月中旬現在、現地の治安や受け入れ態勢の問題もあり、実施できるかどうかを含めて未定です。実施可能となった場合は、新聞各紙およびホームページ上に発表しますので、そちらをご参照ください。

昨年度の募集要項の入手方法

1. UNHCR東京事務所のホームページ (<http://www.unhcr.or.jp>) を参照する。
2. 90円切手を貼った返信用封筒を同封して、郵便で資料請求をする。
3. 電話でのお問い合わせにはお応えできません。

コラム 難民の子どもたちの 絵が絵葉書に



絵葉書16枚のうちの2枚

5人が持ち帰った難民の子どもたちの絵は、東海銀行国際財団の製作協力によって絵葉書となった。この難民の子どもたちの絵葉書は読売新聞、朝日新聞などで紹介され、現在までに大きな反響を呼んでいる。絵葉書の販売で集まった資金は、UNHCRを通して難民の子どもたちのために役立てられる。

1か月の滞在で参加者は多くのものを見て、体験し、得ることが出来たのではないだろうか。帰国後、「キャンプ・サダコ'98」のメンバーは学生、社会人それぞれの日

常に戻ったが、今後とも、絵画展、学校、一般向けの報告会など、“私たちにできること”をテーマに限られた時間を有効に使って難民のための広報活動を積極的に展開していきたいと思っている。

なお、参加者はみな、少しでも多くの人に、このアフリカの難民の子どもたちの絵葉書を見て欲しいと考えている。絵葉書は1セット16枚入り、500円(送料込み660円)。

絵葉書の申し込みは、住所、氏名、電話番号、希望セット数を明記の上、東海銀行国際財団まで(FAXのみ受付)。申し込み後、代金の振込先を指定した用紙と絵葉書が送られてくる。(FAX:052-211-0934)

Update

世界各地の 難民状況

詳細はインターネットの
ホームページをご覧ください

<http://www.unhcr.or.jp>

UNHCR、コソボ住民の 避難を支援 高等弁務官、停戦を 再度呼びかけ

緒方貞子高等弁務官は1月21日、コソボにおける停戦を再度呼びかけた。「バルカン半島の厳寒のさなかに、女性や子どもが再び故郷を追われている。コソボ紛争の即時終結のため、政治的な解決が急務だ。」

UNHCRは、コソボ南部ラチャク村と周辺の最近の戦闘を逃れた住民は5300人と推定。うち数百人は雪の降る氷点下の寒さの中、野宿している。紛争地域の外の比較的安全な村に逃れた住民もいるが、多くは治安部隊がいる道路に近づくのを怖れて、野営地にとどまっている。少なくとも幼児3人が凍死したと伝えられる。

「避難民の多くは女性や子どもで、怯えきっている。戦闘で家族を失った人もいる。これ以上民間人の犠牲者が増える前に、彼らの避難場所を確保しなくてはならない。」

UNHCRは引き続き、欧州安全保障協力機構(OSCE)の停戦検証団とともに女性、子ども、高齢者に付き添って避難させている。高等弁務官は、「私たちの人道活動を続けるために、検証団は必要なパートナー」であり、「その到着は、多くのコソボ住民を安心させた。それゆえ、11万人近くの住民が10月以降、故郷の村への帰還にふみ切ったのだ」と語った。

しかし、昨年クリスマスに新たな戦闘が起こって、2万人が再び故郷から逃げ出した。コソボ紛争による避難民の総数は30万人以上に達し、うち18万

人はコソボ内にとどまっている。
(99年1月21日現在)

誘拐されたUNHCR 事務所長、ついに解放

10か月余にわたり誘拐されていた北オセチアのUNHCR事務所長がついに自由の身となった。

98年12月11-12日夜半に解放されたフランス人のバンサン・コシテル所長(37歳)は同年1月、武装した覆面男3人に、北オセチアの首都ウラジカフカスの自宅から誘拐された。その直後から解放交渉と救出の働きかけが、誘拐犯、ロシア、仏両政府などに対して続けられていた。

317日間の悪夢の末に救出されたコシテル所長は疲れきっていたが、身体に異常はない模様。緒方弁務官は、解放を同所長の家族(妻と7歳と6歳の娘2人)、全職員と心から喜び、関係当局の尽力に謝意を表した。また、世界中で日々、援助職員が強いられる同様の危険に世界の注目を促した。(98年12月12日現在)

UNHCR、「1999年グローバル・アピール」で9億ドルの資金拠出を訴える

12月11日、UNHCRジュネーブ本部で、緒方貞子高等弁務官は、1999年に世界2200万人に対する援助事業予算として、9億1480万ドル(約1100億円)が必要であると発表した。

緒方弁務官は「世界中の難民・避難民を、一人当たりわずか一日11セント(約13円)で支援できる」と述べた。

今年度(暦年)のUNHCR事業計画をまとめた「1999年グローバル・アピール」(360ページ)で、緒方弁務官は「コソボ、カフカス地域、アフリカ大湖地域や西アフリカなど、世界中で資金不足が生じ、人道援助活動を困難にしている」と指摘した。

UNHCRの資金は、98%を自発的拠出金で確保し、上位15位の拠出国・機関がその大半を負担している。

主な大規模援助地域は、旧ユーゴスラビア(1億5600万ドル)、アフリカ大湖地域(9700万ドル)、東アフリカ・アフリカの角地域(9600万ドル)、西アフリカ(8000万ドル)などだ。

UNHCRの予算規模は1994年、ボスニア紛争とルワンダ難民流出によって史上最高の14億ドルに達した。その後、大きな緊急事態が収まったため、予算と職員数を大幅に削減している。(98年12月11日現在)

世界人権宣言50周年 密接に関わる人権と難民保護

緒方貞子国連難民高等弁務官はパリで、世界人権宣言採択50周年にあたる12月10日、世界の指導者たちとの記念式典に参加した。

「世界人権宣言の採択から50年の歳月を経ても、世界中で基本的人権を侵害され、その結果として難民が発生している事実は、まことに嘆かわしい。だからこそ、難民を保護する体制が不可欠なのです」と発言した。

1998年、新たな難民が発生した。シエラレオネでは、多数の民間人が反乱軍の残虐行為を受け、21万5000人が難民になった。現在、アフリカ大陸で最も多いのはシエラレオネ難民で、44万人が隣国ギニアやリベリアに流入した。また、ユーゴスラビア連邦のコソボ紛争では、25万人以上が家を追われている。

「人権尊重を訴え、難民が安心して帰国できる条件を整えることは、人道機関だけで達成できない。問題に長期的に関心を持ちつづけ、時宜を得た政治的介入と難民発生の原因を取り除こうとする国際社会の断固たる意志が不可欠。人道行動は人命を救っても、政治行動の代わりにはなりえない」と緒方弁務官は強調した。

(98年12月10日現在)

読む資料・見る資料

さしあげます

季刊誌

「難民 Refugees」—— 難民問題の現状と保護・援助のあり方をめぐる情報誌。特集には難民保護と国際社会の対応、人道援助活動をめぐる将来の展望など、各層の視点を紹介します。

パンフレット

1 難民女性とは—— 難民の8割をしめるのは女性と子ども。暴力の犠牲となりやすい女性たちの実態を取り上げます。

2「リーフレット」—— UNHCRの活動や難民問題の解決方法などを、イラスト入りで簡単に紹介しています。

「わたしたちの難民問題」—— 大学生などUNHCRの若いボランティアの協力で高校生向けにつくった入門書。（「僕たちの難民問題」改訂版）99年1月、さらに内容を改訂しました。

「難民の子どもたち」—— どうして難民になったのか、逃げる途中でどのような経験をしたのか、キャンプではどんな生活を送っているか、そして将来の夢など、子どもたちの声が聞こえてきます。小学生から高校生向け（20頁）

1. **ポスター 2種類**—— 世界の難民の子どもが描いた絵画から、「あなたの子はこんな絵を描きますか」

2. **ポスターセット**—— 難民地図、UNHCRや難民などについての説明と写真で構成したセット。10枚一組。サイズA2（42×59cm）

UNHCR 早わかり

UNHCR 早わかり(最新版1997年11月発行)
UNHCRの概要

ニュースレター

UNHCR News(現在の難民の状況とUNHCRの援助活動)

募金箱

難民援助の募金にご協力ください。
ボール紙製 8.5×18×13cm
プラスチック製 8.5×18×13cm
プラスチック製は折りたたみ不可
詳しくはお問い合わせください。

お貸しします

展示用パネル—— 文字、写真パネル、世界難民地図を合わせ20枚が1組です。(68×47cm)
貸出し希望期間、使用目的、主催者をお知らせください。(ご要望が多いため、2か月前にはお申し込み下さい)

ビデオテープ

- 1(日本語吹替え版・字幕版)
ほんのちょっと変えてみよう(14分)
- 2(日本語吹替え版)
世界の難民はどこに1997-1998(17分) 難民女性(13分)
- 3(日本・韓国 地域事務所制作)
難民もみんなも同じ地球人(19分)中学生向き

UNHCR日本・韓国 地域事務所はホームページを開設しています。ぜひご活用ください。

<http://www.unhcr.or.jp>

お問い合わせ先

UNHCR(ユ・エヌ・エイチ・シー・アール)

日本・韓国 地域事務所 広報室

〒107-0052 東京都港区赤坂 8-4-14

TEL03-3475-4882

FAX03-3475-4884

資料や募金箱は、基本的に無料です。ただし送料と、資料枚数の多い場合はコピー代がかかります。広報室宛に、ご質問も含めて官製はがきでお申し込みください。できる限り着払い(宅急便または郵便小包)をお願いいたしますが、ご無理な場合、送料分の切手を、資料受け取り後、同封のアンケートと共に広報室宛てにご返送ください。

UNHCRニュース No.10

1999年2月

発行

UNHCR日本・韓国 地域事務所

広報室

郵便振替

口座番号:00130-4-59734

加入者名:UNHCR

表紙写真

左上: タイからラオスに帰還した子ども。親が働く間、幼い弟や妹の世話をする。

UNHCR/A.Taylor
右上: 破壊された村に戻ったコンボのアルバニア系老夫婦。
UNHCR/R.LeMoyne

左下: 伝統的な手工芸品を作って売るグアテマラ帰還民の女性。
UNHCR/B.Press

右下: コーランを学ぶ西サハラ難民の子どもたち(アルジェリアで)。
UNHCR/A.Hollmann